

戸田城聖が出版した子母澤寛著作目録

塩 原 将 行

1. 「新石狩市と子母澤寛～同郷人 戸田城聖との出会いから～」展

北海道の石狩市民図書館において「新石狩市と子母澤寛～同郷人 戸田城聖との出会いから～」展（2006年9月14日（木）から28日（木））が企画され、市民図書館の要請を受けて、研究所所蔵の戸田城聖（城外）が出版した子母澤寛の単行本を揃えて出展させていただいた⁽¹⁾。

戸田と子母澤は、同時代に幼少期を旧厚田村で過ごしている。2005年10月に石狩市・厚田村・浜益村の1市2村が合併し、新「石狩市」が誕生したが、同展は、その新石狩市誕生1周年を記念しての企画である。同展では、子母澤寛とその執筆活動を支援した同郷の友・戸田城聖との交友を中心に、厚田村が生んだ2人の偉人を紹介、子母澤が身近で使った品々や戸田が出版した36冊⁽²⁾の単行本などが展示された。

9月14日（木）午前10時30分より、田岡克介石狩市市長、四宮克同市教育長らが出席してオープニング・セレモニーが行われ、田岡市長からは、「当図書館で毎週のように行われている企画展のなかでも、本格的な文学を紹介するすばらしい企画展である」とのスピーチがあり、続いて、筆者から、子母澤寛と戸田城聖の交友を中心に挨拶をさせていただいた⁽³⁾。

2. 出版目録

戸田城聖（城外）が出版した子母澤寛の単行本は以下のとおりである。出版社別、初版の発行年月日順に、書名・初版発行年月日（再版以降の奥付に従った場合もある）・確認できた最終版と発行年月日を掲載する。書名は奥付による。同じ書名で初版等の発行年月日の異なるものは、①、②、③で区別した。それ以外にも版型の異なるもの、ハードカバーとソフトカバーが出版されているものもある。

⁽¹⁾ 出版目録の中の『奔流』は、創価教育研究所に所蔵していない為、江沢敏和氏の協力をいただき、全36冊を展示することができた。

⁽²⁾ 展示会では37冊としたが、今回出版目録作成にあたり日正書房の『男の肚』①、②を1冊と数え36冊とした。

⁽³⁾ 本稿の3. 解題は、オープニング・セレモニーのスピーチに加筆したものである。

<大道書房>

1. 大道
①初版：昭和15年5月25日
再版：昭和16年10月30日
②初版：昭和15年5月25日
再版：昭和16年9月15日
2. はればれ街道
初版：昭和15年6月18日
4版：昭和16年12月18日
3. 三味線堀
①初版：昭和15年7月18日
4版：昭和17年3月25日
②初版：昭和15年8月18日
*②は①より版型が大きい。
4. お小夜手鞠
初版：昭和15年8月18日
6版：昭和16年9月10日
5. 飛驒の兄弟
初版：昭和15年9月10日
4版：昭和17年5月15日
6. 赤城の雁
①初版：昭和15年9月10日
再版：昭和16年8月15日
②初版：昭和16年4月30日
再版：昭和16年6月10日
③初版：昭和16年4月30日
再版：昭和17年3月30日
*表紙・背表紙の文字が異なる。
7. 意地ッ張地蔵
初版：昭和15年11月15日
7版：昭和17年3月30日
8. 源太郎星
初版：昭和16年3月15日
4版：昭和17年2月20日
9. 烈風
初版：昭和16年5月10日
4版：昭和17年5月20日
10. 光圈主従
初版：昭和16年5月20日
11. 飛ぶ野火
初版：昭和16年6月8日
4版：昭和16年12月5日
12. 女夫系圖
初版：昭和16年7月25日
3版：昭和16年8月20日
13. 地獄駕（前編）
初版：昭和16年8月15日
14. 開墾
初版：昭和16年8月20日
改訂4版：昭和16年12月20日

- | | |
|--------------|---|
| 15. 地獄駕（後編） | 初版：昭和16年8月25日
5版：昭和17年4月5日 |
| 16. 國定忠治 | 初版：昭和16年9月10日
再版：昭和16年9月15日 |
| 17. 野火の鴉 | 初版：昭和16年9月18日
再版：昭和16年9月15日 |
| 18. 奔流 | 初版：昭和16年10月30日 |
| 19. 菊杯 | 初版：昭和16年1月10日 |
| 20. 男の顔 | 初版：昭和17年4月15日 |
| 21. 勝安房守 第一卷 | 初版：昭和17年7月10日 |
| 22. 勝安房守 第二卷 | 初版：昭和17年10月18日 |
| 23. 勝安房守 第三卷 | 初版：昭和17年11月18日 |
| 24. 勝安房守 第四卷 | 初版：昭和18年7月20日 |
| 25. 勝安房守 第五卷 | 初版：昭和18年11月20日
*第四、五巻は、戸田の検挙後に出版されている。 |

<日本正學館>

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 26. 男の肚 上巻 | 初版：昭和20年11月30日
*裏表紙には、日正書房とある。 |
|------------|-----------------------------------|

<日正書房>

- | | |
|-------------|---|
| 27. 起上り小坊主 | 初版：昭和20年3月15日 ⁽⁴⁾
*裏表紙には、大衆社とある。 |
| 28. 男の肚 上巻 | 初版：昭和20年12月15日 |
| 29. 男の肚 下巻 | 初版：昭和20年12月15日 |
| 30. 男の肚 | ①初版：昭和20年12月15日
再版：昭和21年4月20日
②初版：昭和21年3月18日
再版：昭和21年4月15日 |
| 31. 勝海舟 第1巻 | 初版：昭和21年3月18日 |
| 32. 勝海舟 第2巻 | 初版：昭和21年4月5日 |
| 33. 地獄囃子 | 初版：昭和21年10月30日 |
| 34. 鬼火 | 初版：昭和22年1月20日 |

⁽⁴⁾ 発行人は、戸田城聖となっている。城外から城聖への改名は出獄した昭和20年7月3日とされている。本
当に戸田の出獄以前に発行されたのか、もしくは誤植か確定できない。昭和21年4月2日の朝日新聞、
読売新聞広告には、『男の肚』、『勝海舟』とともに出ているので、それ以前であることは間違いない。

35. 投げ節彌之 初版：昭和22年3月20日
 36. 最後の江戸っ児 初版：昭和22年5月20日

3. 資料解題として：子母澤寛と同郷人戸田城聖

昭和27年7月21日付読売新聞の「ふるさと記」に、子母澤寛は、「札幌から十一里、淋しい四百戸ばかりの厚田という漁村。南から峠を越えると直ぐ目の下に村が見える。真ん中に東から西へ川の流れ、これがきらきらしている。東も北も山、西に海が開けて晴れた日は対岸の小樽の港の青い山が手にとるようだ。わたしども学生の頃、夏休みで峠のてっぺん迄出ると、もう泣けてきちまって、坂道を駆けつづけて家へ飛び込んだものです。」と書いている。

子母澤には、故郷厚田を愛情込めて書いた文章がたくさんある。戸田城聖もまた、同様に故郷に格別の愛情を持ち、青年達にたびたび故郷のことを語っている。池田大作が戸田とともに厚田村を訪問した感動は、詩「厚田村」となり、広く世界に同村が知られることとなった。「湖底の故郷」の一節に、「さらば湖底の我が村よ、幼き夢の揺籃（ゆりかご）よ」とあるが、夢のゆりかごのような楽しい思い出、人々がいなければ、故郷をはなれて何十年たってもそのような思いを持ち続けることはできないだろう。

昭和18年、戸田は、軍部政府の政策に反対するものとして、治安維持法違反、不敬罪の容疑で、検挙、投獄された。当然、戸田から離れていく人も多し中、厚田で培われた戸田に対する子母澤の友情は変わらなかった。

子母澤の小説は、故郷厚田、そして、箱館戦争に敗れて厚田に流れてきた祖父の体験がその基にある。また、人間の生き方をテーマとして、わかりやすく、楽しく読めることを目指している。確かに、ある世代以降、子母澤の名前を知らない人が多くなった。しかし、子母澤の名は知らなくても彼の作品が原作となった座頭市をはじめ、映画、大河ドラマは多くの人々の心をとらえ、共感を与え続けている。一人ひとりの幸福が、国家のために犠牲となることを強いられた時代に、人間とその生き方に光をあてて書かれた子母澤の作品が、再び脚光を浴びる時代が必ずくると私は思っている。

現在、子母澤の全集は、昭和38年に中央公論社から10巻の全集が、昭和48年に講談社から25巻の全集が出版されている。今回出展にあたり、戸田が出版した子母澤の36冊の本が、全集に収められているかどうか調べてみると、実に17冊の作品は収録されていない。3冊は目録にも入っていない⁽⁵⁾。

⁽⁵⁾『子母澤寛全集』25(講談社 昭和50年)の磯貝勝太郎編の著作目録には、日正書房発行の『地獄囃子』、『鬼火』、『最後の江戸っ児』は記載されていない。また、同目録で、大道書房から昭和16年5月発行されたとされる『あばれ行灯』、『鬼火』、『夕立日記』の3冊は、大道書房発行の単行本の巻末にある出版目録にはない。また、『書籍年鑑』に大道書房発行の同書名がない。①昭和16年5月、大新社発行の『あばれ行灯』を創価教育研究所が所蔵、②昭和16年5月、大新社発行の『鬼火』を国会図書館が所蔵、③『書籍年鑑 昭和17年版』589頁に大新社発行の『夕立日記』の記載があることから、この3冊は、大道書房ではなく、大新社発行ではないだろうか。

戸田は、昭和15年から、雑誌『小学生日本』を創刊し、1万2千人もの子どもたちに通信添削を始める。100万部の大ロングセラーになった『推理式指導算術』をはじめとする20冊を越える学習参考書の出版、そして、創価教育学を普及するための教育雑誌『新教材集録』の編集、私塾時習学館の経営など、戸田が、大衆小説の出版にまで手を出す余裕があるとは思えない。

それでは、なぜ、出版社大道書房を作り、子母澤の小説を出版したのか。それは単に大衆小説を出版するために出版社をつくったのではなく、むしろ、同郷の友、子母澤のために、教育分野の日本小学館とは別に、出版社を作りたいと考えるようになったからではないだろうか。